

## ロシアはサインを出してきたのか



大前 仁

ロシアが昨年2月、隣国ウクライナへの軍事作戦を始めたこと余波を受け、日本との外交関係はほぼ凍結されていた。平和条約交渉についても「対話の扉は閉ざされている」(ザハロフ露外務省情報局長)と、かたくなな姿勢をのぞかせていた。

そのさなかの9月半ばのことだ。「日本が制裁を解除しない限り、平和条約問題は話し合えない」。岸田文雄首相が内閣を改造したことを受け、ロシア上院国際委員会のカラシン委員長が見解を出した。現時点で、日本が制裁を解除する余地はない。カラシン氏は長年、外務次官を務めた人物だから、この辺の事情は十分に理解しているはずだ。それでも政府間協議を再開できる可能性に言及し、日本へのメッセージを出してきた。そう読み取ってもいいのかもしれない。

それに続いたのが、鈴木宗男参院議員の訪露だった。10月1日からモスクワを訪れると、ロシアのルデンコ外務次官らと会談した。その席上、昨年から

滞っている島民による北方領土での墓参の実現などを訴えたという。日本国内で騒ぎを巻き起こした鈴木氏の訪露だが、一連の会談自体に大きな意味があったわけではない。ただしロシアの姿勢からは変化ののびを感じ取れる。

今年のゴールデンウィークを前にして、鈴木氏はロシア訪問を企図していたが実現しなかった。ロシアの要人と会えそうにもなかったことから、訪露自体を諦めざるを得なかったからだ。つまり5カ月前のロシア政府は鈴木氏の訪問すら受け入れなかったのに、今回は要人との会談の場を設けていた。

もう一点変化の兆しを挙げることができよう。プーチン露大統領は10月5日、国内外の有識者と意見を交わす「バルダイ会議」に出席。日露の専門家から対話を再開する可能性があるのかと問われると、「扉を閉ざした国からイニシアチブを取るのなら、我々が反対を唱えたことはない」と答えた。ロシアの意図はどこにあるのか。短期的に見れば、制裁をかけてきた西側諸国の結束を揺るがすが狙いではないだろうか。日本国内では鈴木氏訪露を巡る騒ぎにばかり関心が払われたが、少しずつ日露関係が動き出しているようだ。(9月まで赴任)